

# 婦人徳



第六卷  
第一號

東京  
弘道館

香

# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手摺歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざるべし。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

# 會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分加纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十九年一月二日印刷  
同 年一月五日發行

不許複製

發行所 兼 東京市麴町區富士見町六丁目十番地  
編輯者 有 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
印刷所 熊田活版所  
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 昌 堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

謹しみて  
新年を祝し  
併せて

會員  
讀者 諸君 諸姉

の健康を祈り候

明治三十九年一月五日

婦人と子ども編輯部

## 新年の辭

光榮の明治三十八年は去りて茲に讀者とともに三十九年の新春を迎へ本誌「婦人と子ども」は今や六歳の齡を重ねるに至りぬ。既往五年間着實眞率なる態度を以て聊か斯道の爲に盡瘁する所ありしは諸君の既に知了する所、今後益々奮勉努力諸君の同情に由りて偏へに本誌の本分を完成せんと欲す。

希望多平第一の年

▲本誌は婦人雑誌のうちの米飯ともいふべきものでありまして、讀んで飽きるやうなことはありません。  
▲なかに書いてあることは、たになるお話や、おもしろい小説や、手輕な料理や上品な人となるをしへや、家庭を治める法などがかいてあつてもう何から何まで丁寧親切であります。

第三號  
は廿九  
年の元  
日發行



元旦に好書をすむ

▲それに文章は名高い人の筆で、極平易で趣味あるかきかたでありますから、讀んでしらすしらすのうちによくたつ智識と優しい心とを養ふことが出来るものであります  
▲まことに婦人の好伴侶としてこのうへもないと信じます

- 繪葉書「さよさ乙女」.....スペイン.....エ
- 新年來.....宮田
- 村寺の鐘.....山口孤劍
- いつくしみの心.....山根正次
- 初音の記.....馬千庵
- 女子と工業.....三輪田元道
- 新春の句.....半佛
- 簡易染色法.....秋山利正

毎月一回  
一日發行  
定價八錢  
郵税五厘

發行所  
東京市四谷區内藤町一番地  
ろノ十八號  
明治の婦人社  
(電話番町一〇三三)

- 彼は富我は仁.....嘉悦孝子
- 初おとづれ.....島中翠湖
- お嬢様とお化粧.....水谷東江
- 私どうしませう.....谷村江風
- 病人の食物.....萩村あき子
- 悲境の畫神(小説).....河越てる子
- 軍艦内の新年.....本城秋雨
- 初お目見え.....森桂
- 女子と讀書.....記者
- 新聞語彙.....記者

前付の二

活世の母らも 平和時代の人のらむ者 本誌をよむ者と

婦人と子ども 第六卷第壹號目次

卷首

子らの中に立てる母

子ども

白い雀.....やまとの翁.....一頁

子供の新体詩.....二四

婦人と子ども

邦人の四大欠點と子供の教育.....尺 秀三郎.....二六

子供の教育と自然物.....竹島 茂郎.....三三

實驗上の育児.....瀬川 昌耆.....三七

新年の重誥.....石井泰次郎.....三三

お正月と子供の教育.....東 基吉.....三五

子供の玩具.....同.....三六

電車と子ども.....あづま.....三七

貞一の日記.....くの母.....三八

子どもらのはなし.....記 者.....四〇

俳句端書集.....鹽野奇零.....四四

漁夫.....雨 峯 生.....四四

雪の夕.....胡山々人.....四四

幼稚園と家庭

幼稚園から家庭へ望む事ども.....東基 吉述.....五二

幼児への談話の仕方.....和田 實.....五三

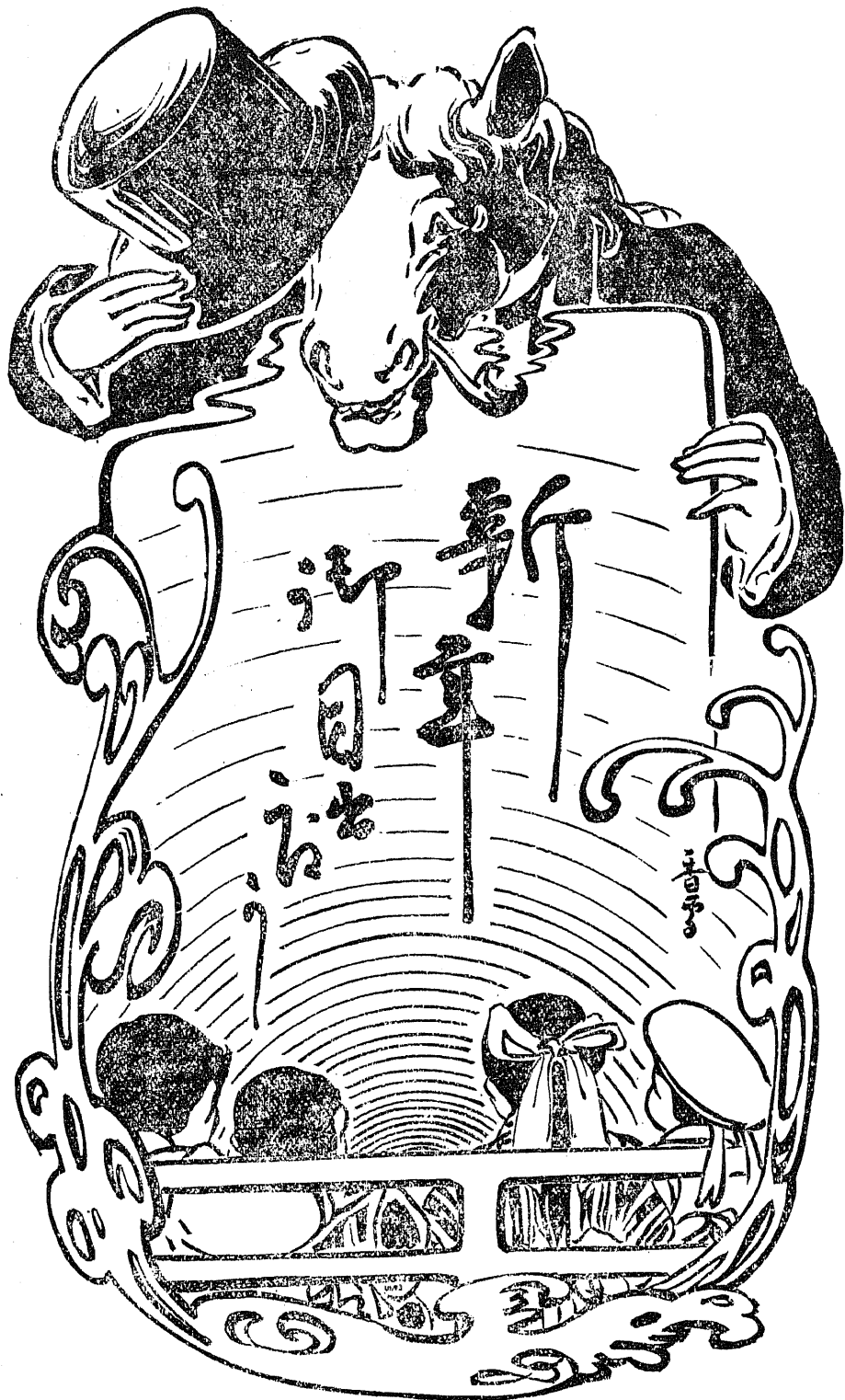
雑報

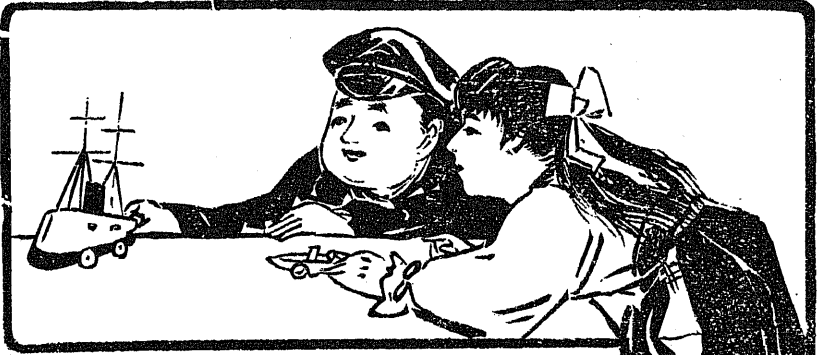
懸賞募集 神戸通信 新刊紹介.....五七

會報



母るてたに巾のもど子





もど子と人婦  
號壹第卷六第

もど子

白しろい雀すずめ

やまとの翁

これは西洋でのおはなし。むかしくまづある處に田た五ご作さくといふ一人ひとりの農夫ひやうしやうがありましたとさ。家うちには可成かなりお金かねもあり、親おやの代しろからの田ただの畑はたけたのも大分だいぶ



持って居たのですが、田五作は性質大の朝寝坊で、其上怠けも  
のときて居ますから、田や畑のものは年々收穫が減つていきま  
すし、牛や馬などの育ちも悪くなりますし、今では大分身代が  
へっていつて、もう五六年もたてば、丸で一文無しになつて仕  
舞ひ相になりました。

で、親類だのお友だちなどは、いろく心配して時々田五作に  
つては「そんな風ではいかんじゃないか」といつても見ましたが、  
田五作は一向無頓着で、相變らずの朝寝坊、相變らずの怠け者で  
したから、皆は「田五作といふ男は、氣の毒なもんだが、あれ  
ではとても見込がない」といふので、夫からといふものは、誰  
も彼も見限つてしまつてもう何ともいつてくれるものもなくな

りました。

所<sup>ところ</sup>が友<sup>とも</sup>達<sup>たち</sup>の中<sup>うち</sup>にたつた一人<sup>ひとり</sup>、稻<sup>いな</sup>吉<sup>きち</sup>といふ男<sup>をとこ</sup>、可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>相<sup>さう</sup>に根<sup>ね</sup>が人<sup>ひと</sup>のよい正<sup>しょう</sup>直<sup>ちき</sup>者<sup>もの</sup>の田<sup>た</sup>五<sup>ご</sup>作<sup>さく</sup>だ、何<sup>なに</sup>もそ<sup>そ</sup>う見<sup>み</sup>限<sup>かぎ</sup>つたも<sup>も</sup>んじやない



香<sup>か</sup>る

といふので、その年<sup>とし</sup>の暮<sup>くれ</sup>に、一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>田<sup>た</sup>五<sup>ご</sup>作<sup>さく</sup>の家<sup>とこ</sup>を尋<sup>たず</sup>ねました丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>天<sup>てん</sup>氣<sup>き</sup>もよいので、二<sup>ふ</sup>人<sup>たり</sup>は裏<sup>うら</sup>の畑<sup>はたけ</sup>へ出<sup>で</sup>て、大<sup>おほ</sup>きな木<sup>き</sup>の下<sup>した</sup>に座<sup>すわ</sup>って

いろく世間話をして居ましたが、稲吉は、ひよいと頭を上げて、木の上の方を見ると、雀が五六羽、枝に留って、しきりにちゆーく囀づって居ました。

「一体あの雀といふ小鳥は、あれで中々狡猾なんだ、そして畑のものを荒らすことはこの上なしときて居る上に、蕃殖るのが馬鹿に早いのだから耐らない」

稲吉がこういって、田五作の顔を見ると、田五作は心の中で「はてな、それでは、畑のものが、近頃だんぐ減っていくのは、なる程、ひよっとかすると、この雀どもがきてあらすからかもしれない」

と、黙って考へて居る、すると稲吉は、ふと思ひだした

様な調子で

「時に田五作さん、君は白い雀つてのを見たことがありませんか」と問ふと田五作は不思議相な顔付きで

「白い雀つて見ないな、大低の雀は、そう、ざっと茶色の様で  
すぜ、白い雀なんて居るかしらん」

と答へると、稻吉は

「いや、僕も見た事はないのだが、實際居るといふ話ですよ、  
現に、この近所へも来て居るといふとで……然し、そいつは毎年  
一羽づゝしか出ないし、その上他の雀共に見付るとひどくいぢ  
められるもんだから、毎朝早く巢を飛び出して行て餌をさがし  
て、すぐ巢に歸つてしまふので、中々容易に見つからん。そこ

でこの白い雀を見つけた人には、思ひがけない福が授かるといふことじやから、僕はこれから、そいつを見付け出さうと思つて骨を折ってゐるんだが……」

「へ、へ、そりやめづらしい話だなあ、僕も、一っ見付けたいものだ」

と、田五作は答へると、稻吉は

「じゃ、君これから二人で見つけくらをしようじやありませんか」

「うん やって見ませう」

といふので、其日はそんなり分れました。

さて其翌朝、田五作はめづらしく疾うから起きました。「なんで

も稻吉君よりか先に、白い雀を見つけたいもんだ」といふので、  
 寒いにも構はず、ぐるっとやしきのまわりを見廻ってやがて、  
 裏の畑の方へ出て、あちらこちらと、方々をさがして見たが、  
 白い雀の影さへ見えない。

「あゝあ、この寒いに馬鹿を見たわい」  
 と、そろく家の方へひっかへしてくると、お日様はもう空に高  
 く上って居て、近所の子どもなどは、大勢がやゝつれたって  
 學校へ行かうとして居るに、自分の家丈は、まだ戸もあけない  
 で、誰一人起きてゐるものもない、田五作はなんだかいまゝ  
 しくってしようがなくなりました。

そのうちに、下男が一人麥俵をかついで、裏口から出て來たの

で、田五作は、

「多分水車場へ行くんだらう、夫にしても、こんなに遅くまで寝て居るとは怪しからん」と思ひながら、そーっと、後をつけて行って見て驚いた。下男は水車場へは行かなくって、さっさと居酒屋の方へ行く。この居酒屋といふのは、かねて、下男がたびく飲みに行つて、随分酒代の借金が出来て居るので、其借金の埋め合はせにと思つて、今この麦俵をそこに持つて行かうとして居たのであつた。田五作は、叱驚してすぐ追っかけて行つて、その麦俵をとり戻しました。夫から家へ歸つて來ますと今度は下女が牛乳桶を片手にさげて、牛小屋から出て來りました。「どうするのかしらん」と思つ



春雪



て、そーっと見て居ると、下女は牛乳桶をさげて、さっさと隣の家へ行く、田五作は不思議に思つて、尙黙つて、窓から見て居ると、これは驚いた。この下女は、毎朝主人の知らぬ間に、主人の牛乳を黙つて、隣りの家へ賣つて居たのであつた。

そこで、田五作は大急ぎで家の中へかけこんで行くと、女房さんば、高いびきでまだぐーくと寝て居ます。

「おい／＼早く起きないか、こんなに朝寢坊をするから、家の身代が減つて行くのだ」

といつて、大聲でおこして、さて、今見たことを話しますと、女房さんも「まあ」といって驚いて居ます。

それからといふものは、田五作は毎日／＼朝早くから起きて、

下女や下男を畑へ仕事にやり、自分は、白い雀を見付けるのに  
一生懸命になつて居りました。

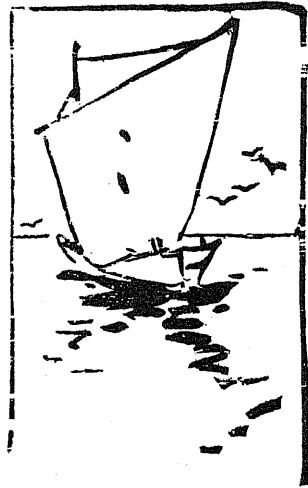
夫から十日許りたつと、お正月になりましたが、田五作の一生懸命になつて居た白い雀は、どうしたもののか、とうく見付かりませんでした。

で、田五作も、その事はもう思ひきつてしまつてたゞ、まい朝下女や下男と一所に疾うから起きて働くこと丈けをやつて居ましたが、其おかげで、減りかよつて居た身代が、また、だんく増してくるようになりました。

すると、ある日のこと、稻吉が、お正月のお禮にやつてきて、まづ新年の御祝儀をのべて、それから

「どうだ君、白い雀は見つかりましたかな、……」  
と笑ひながら尋ねました。すると田五作は、ちよつと頭を掻きながら

「やああれは、とうく見っからなかったか、然し君喜んで下さい、福丈けは授かりましたよ、去年までの僕の朝寝坊がやんで、朝起きになつたお蔭で、身代のよくなつたのは全く君が知らせてくれた白い雀から福が授かつたんです」  
といつて、大層お禮を申しましたとき　めでたしく



●子供の新体詩

○凱旋

尋常第三學年 榎戸勝五郎

われらは日本だんじです

はたちとなればへいとなり

いくさとなればはたらくぞ

大づゝ小づゝ打ちはなし

ろこくの軍をうちこらし

とーく日本大しよーり

今はいくさがやめになり

東郷さんはかへつたよ

大山さんも歸つたよ

がいせん門をこしらへて

いはひのはたをいざたてん

○全

尋常第三學年 太田とよ

今はいくさがおしまいだ

へいたいさんがおかへりて

わたしたちまでうれしいは

こっきを出していはひます

がいせんもんやかざりもの

それを大ぜい見に行くとよ

○全

尋常第三學年 關

口

われは日本の男子なり

大きくなればいしなり

いのちをおしむろしやい

いのちおしまぬ日本軍

がい千門もできました

大山さんもいまかへる

とーごーさんもかへりたり

日本のいくさは大小里

○電 車

尋常第三年 榎戸勝五郎

きれいなでん車花でん車

ほくものろうかぜにもたず

よつぼときれい花でん車

人がみなのる上野行

せんろを通るはなでん車

この歌はお茶の水附屬小學校の

第三部の子供らが右の様な

題で勝手につくつた中からとつて

こゝにのせたのであります

婦人と子ども



邦人の四大缺點と子供の教育

尺 秀 三 郎

昔文王の母大任は、胎教の事につき最心を用ひたと云ふのですが、兒の胎内にある時でさへ、猶此の様です、況して兒が生れて後はこれに種々の方法を以て教育を施し得べきはいふまでもありません、就中、幼稚教育の最必要なるは、各國に於ても殊に唱導する所です、ギリシヤのアリストートルは夙にこの教育につきて論じてあります、即幼稚教育を二期に分ち、初生兒より四歳までを第一期とし、四歳より七才までを第二期とします、幼稚園教育は即この第二期に當るものであります、然れども此教育は

決して學問技藝を教ふるのではありません、先づ其主とする所は身體の保育にありませぬ、即ち幼稚園は他日に於て諸種の事物を知るべき機關の基をつくる所であると論じました、其後「コメニヤス」母の膝下の教育」と題した書をあらはして、盛に幼稚教育の事を論じました、此の様な説が種々ありましたが、是等教育の事を實地に行つたのは所謂フレーベル氏であります。

フレーベル氏が出てから、幼稚園教育は諸國に盛になりました、先づ獨逸國より起りて漸次隆盛を來し、次で英米に於ても又完全なる結果を來しました、而して何れの國に於きましても未だ幼稚園教育に於て學問技藝を教へたといふことをききません、即ち幼稚教育に於て最大切なのは、人間の心の傾きの基礎を作るとです、即ち習性を作るに在るのです、去る四月二十一日の總集會に於て中島先生の習性につきての講話の中に習慣は幼時に於て矯正すべきこと、且日本人の欠點を擧げて之を矯正すべき方法を教育家に向ひて尋ねられましたから、私はこれより其間に答へて之を矯正する方法を説かうと思ひます。

(第一)の欠點は不規則といふことであります、抑この不規則といふことは、只に一個人にて行へば其人一人にのみ關するものであるけれども、之を他人に對して行ふときは、其不都合の生ずるには實に甚しきものであります、人に對しての不規則と云ふのは他人を訪問する時などです、此等は其最も甚しきものゝ一です、又不規則の爲に、或は身體に害を及ぼすことがあります、或は徳育上に悪しき結果を來すことがあります、されば吾々は之より漸々規則正しき方に進まなければなりません、今順次其矯正の

法を述べませう。

第一には小兒に起臥の時間を一定させるとが、最必要です、斯くすれば一日の長さに定りが出來ます、一日の長さに定りが出來れば其内になすべき仕事の分量に定りが出來ます、そうすると其仕事は即規則正しき結果を生ずる様になりす。

第二には、自分等が小兒を集會又は汽車馬車などに伴ひ行く場合には可成的この時間に接近して行くやうな習慣を附けるとです、遅きに過ぐるときは勿論、惡い事です、さればとて又早きに失するときは同じく弊害を生ずるものでありす。

第三には、身體の健康と云ふとも又規則正しき生活をなすに當り最大なことです、もし身體健康でなければ外部の攻撃に抵抗することが出來ません不規則は健康を損する基です、故に健康を保ちゆく上に規則といふものは最必要です。

第四、凡そ人は感情の強きものなれば往々之によりて不規則に誘はるゝことが多いです、かゝることはよく注意して決して結情の爲に動かさるゝことなく、よく己の意志を以て判斷して事を決行する様な習慣を作るとが必要です。

第五、規則正しき習慣を養ふにつき最必要なのは人間に性格を作ることでありす、性格とは道義を標準として之に外れたることは決してしないと云ふ習慣を養ふことです、只一時の快不快をもて容易



く已が行爲を變更する様なものがあつてはなりません、抑道理には二つありません、さればこの道理を本として行ひ行く時は、即規則正しき人間を作ることが出来ず。

(第二)の欠點は吾人の小量といふことであります、之を正さうとするには、

第一の方法として見聞を廣くしなければなりません、即人間と人間及人間と自然との交際の範圍を廣くしなければなりません、即幼兒にありては獨り家庭のみならず、幼稚園などで諸種の交際を廣くすることであり、兎にかく多くの人前に出すことが必要です、其一方便としては旅行をなさしめることは吾人の小量を矯むるによき一方便であります。

第二には人を叱責するに當りて他人に比較して叱責するは其人をして大に其了見を狭小ならしむるものであります、何となれば幼兒はもし己一人のみならば恐らく叱責を受くるとあるまじと云ふ考を起して、其比較されし人を妬むといふ考を起す様になる、これは其人を小量ならしむる一原因であります、凡て善をなすには其事物其もの、善なるが故に之をなすといふを知らせなければなりません、かくすれば大量の氣は自ら生ずる様になりず。

第三、歴史は又人をして大量ならしむる一大學科であります、蓋この學は小なる區域に止まらず已を大なる人物と比較して、或は現今に止まらず遠く往古に迄も溯りて研究するがためであります、古人の漢學者に往々其大量なものがあつたのは故あることであります。

第四には想像力を養ななければなりません、此方に富む人は自ら大量となるものであります、然るにこゝに小兒につきて注意しなければならぬのは、小兒の時は想像が概して強いものです、これは小兒は周圍外界の者について實驗したるを少ないから、想像の極遂に妄想に陥るものでありますから、余りに妄りな想像力を養つてはなりません、小兒に此力を養はしめんとするには、地理歴史の様なもの、最も必要に且便益ある學科であります、蓋地理に於ては例へば一本の線を河とし毛虫の如きものを山とすると云ふとは、大なる想像ですが、其河或は山は常に一定して動くことなければ、限界ある想像となるのであります。

第五には人をして自然の物質の慾にまよはせてはなりません、已の飲食衣服より外に無形にして貴きものあるを知らせなければなりません、即道理といふことを貴ばせなければなりません、むつかしく云へば學科中にも哲學を學ばしむることは又小量を矯むる一方便であります。

(第三)の欠點は我國人は狼狽輕卒なる性癖を有することであり、これは小量と云ふことを裏面より見たので、畢竟小量だから狼狽を生ずるものであります、英人は概して僅かのことには狼狽せざることは實に意外の觀があります、之を正さんには

第一に事をなすに當りて先づ一の計畫をたつる習慣をつくらなければいけません、心に一の計畫を立つる時は決して狼狽といふことはない筈です、かくすればは誤と云ふことは絶てない様になります、これ狼狽

の性を正す最良法であります。

第二に、父母は其子の賞罰を處理するに當りて、最注意しなければなりません、若し小兒のしたことが偶然に出たことならば、假令其結果の善なるにもせよ惡なるにもせよ決して賞罰を施してはいけません、但其事が偶然の結果か否かは見分けることが最むつかしいことです、豫めよくこれらの判断を誤らない様に注意しなければなりません。

第三には、體力を盛にしなければなりません、即柔術、擊劍、水泳などを試みて自己の體力を頼み得るやうにしなければなりません、かくの如くすれば假令變事に當つても、狼狽しない風を養ふことができます。

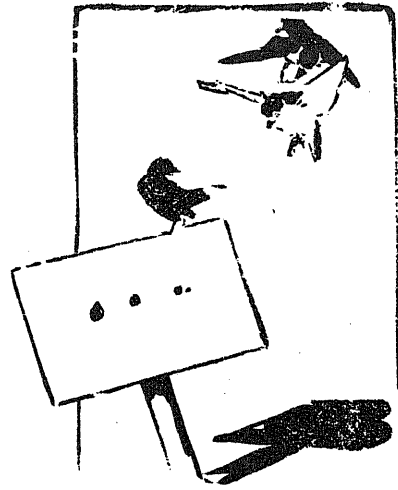
第四には、人各宗教を信することは又其人を沈着ならしむる良法であります、即安心立命すること、が最必要であります、例へはこの宗教の力によりて人間の最も恐るべき死も決して恐れない様になりますし、又かゝる深奥に達せずともこれによりて充分の効果があつてあります。

(第四)の欠點は、我國人は我儘にして公共の徳に乏しいことであり、先づ幼時に於て泣くといふことから其源を發します、この泣く事には種々ありまして、或は饑渴をつけ、或は不安を報するなどであり、或は其源因を究めないで只管無暗に之を慰め様として、種々兒供の興あり氣なことをして見せませんが間違つたのです、例へば子供が饑によりて泣くとすれば、是等によりて饑は治すことがないから

泣くことを止めません、然れども泣く時は常に興あることを見得るを悟り、遂に泣くことを唯一の武器とするに至ります、之より成長すれば泣くことは漸く止むるも、或手段を用ねば人は己が自由になるものなりとの念を起し、遂に剛情となりて、他人の前にては、己が心をまぐることに能はざる人間となり、我儘の性となるものであります、故に幼時より道理ある要求あるにあらざれば、我が父母は決して之を採用しないと云ふ考を入れて置かなければなりません。

第二には、自尊心を養はしむることが肝要です、人が己を笑うから行儀をよくするのではなくて、己が價格を落さざらん爲に行爲を正しくするのであるを心得させることが必要です、この心を發達せしむる時は、即我儘を矯むる一良法となるのであります。





## 子供の教育と自然物

竹島 茂郎

今此の場に於て門外漢なる私が改めて幼稚園の先生方に申上る程の事は何も無い、只私は日頃子供と自然との関係の深い事を感じて居りますので、この感を進めて見たいと思つて、現在その研究をやりつゝあるので、今年もたゞば少しはま

とまつた事が申上られようと思ふから、此の度は唯其の豫備とでも思召して御耳に止め置かれて、此の先更に申上る機會のあつた時の御批評のたねにでもして下さるならば結構であります、最も私の今日の仕事は全く幼稚園に關係なしと申すことは出来ない、否幼稚園は普通教育の基礎をなしつゝあるものであるから、普通教育を完全ならしめんが爲にはどうしても幼稚園から發達せしめてもらはんければならぬので、特に御研究の仲間入を御願ひ申したのであります。

幼児につきての私の觀察は甚だ少く従て之に對する意見としては殆んどないのであります、併し博物を専門として居ります傍ら自然と教育との關係を研究し、自然は人の手の最も加はらぬ事教育はこれと全く反對のことで、この兩者の關係を

研究することは甚だ面白い、倍も自然は是迄多少  
 教育上價值ある材料として用ひられて居るが、併  
 し其の價値の如何は博物の人の見る處と然らざる  
 人の見る處と自ら多少の差あるべき筈であるか  
 ら、余が云ふ處或は我田引水と聞き給ふ御方もあ  
 らんことを恐れて最も公明正大なる事例を引き出  
 さうと思ふ。

抑々此の人間……今日の如く文明に進み將に神の  
 モデルであるかの如く考へらるゝこの人間は、大  
 昔から斯の如くであつたか但しは最初非常  
 れなものであつたかと云ふに、有史以來今日に至  
 る三千年永からざるにあらざれど、これを人類の  
 此の世に現はれたる當初の年月に比せば、人一代  
 に於ける一日にも足らぬ此の三千年間に可なり  
 進歩をなして居るのを認むることは出来るから、

原始時代の人間は如何にわはれであつたかと云ふ  
 ことを想像することは出来ると共に、これを未來  
 に推せば人間が更に如何なる程度まで發達をなす  
 か測り知ることは出来ぬ位である、然らばこの非  
 常なる發達は何によりて出来たものであるか、太  
 古から不完全ながらも今日の如き學校があつたの  
 であるか、あらず、我々は斯の如き人為的の偏  
 狭な教育を受けたのではない、即ちこれ以外に非  
 常に大きな教育を受けて發達したのである、自然  
 と云ふ大學校に於て教育されたのである、更に切  
 言すれば自然が人類と云ふ大なる連續的の生命を  
 教化して今日に至らしめたのである、故に我々教  
 育を職とするものは宜しく斯道の成効者たる自然  
 に學ばなければならぬのである、依てまづ研究の  
 問題が二つに分れる、即ち一、自然が如何なる目的

を以て如何様に人類を教育し來つたのであるか、  
 二、人類以外にも生命を有する物數多きにかゝは  
 らず獨り人類のみ斯の教育の恩典に預ることを得  
 たるはなぜであるか、換言すれば自然が如何なる  
 性情に於てはめて其の教育を施したのであるかの  
 二問題である、そうして此の第一の問題は今日の  
 博物教科研究の根柢をなすもので第二の問題は兒  
 童心理の研究に好題目を與ふるものであろう。  
 個人の發達は全人類の發展の跡を簡單に繰り返す  
 ものであると云ふことは教育上の格言であるが、  
 生理學者の方からはもつと大きく個牀の發達は其  
 の個牀の屬する種族の發展の跡を簡單に繰り返す  
 ものであると云ふことが出来る、即ち我々の如き  
 高等動物も、其のものと實に最も下等なる動物と  
 して認められて居る、單細胞時代からだん／＼進

んで色々の階段を経て遂に人間の形になるのであ  
 る、そうして其の繰り返す道順の長さ丈それ丈教  
 育の功果を受ける性質に畜かるものと云ふことが  
 出来るのである。

借彼の幼兒は犬や馬に向つて特殊の興味を有する  
 ことは皆さんの能く御承知のこと、思ふが、未だ  
 碌々歩むことすら出來ぬ子供が大人もともすれば  
 恐ろしく感ずる馬を見てしかも之に乗らんことを  
 望むは之も如何なる事か、同じ家畜でありながら  
 牛に向ては一向さるけはいなきは如何と問ふに、  
 之は實に彼の我々原人は其の初め野獸の類と雜居  
 して居た頃、諸獸の中で最も愛らしく最も滑稽に  
 見へ從つて子供に如く快瀾に好奇心に富み且無邪氣  
 なる原人は初め面白半分に捕へ來りて馴したるも  
 のは恐ろしくが今の犬や馬の祖先で、牛の如きは角

を有し相恰また甚だ宜しからざれば遙か後世になつて漸く經濟問題の伴ふにつれ其の力を用ふることの利益多きを知るに至りて之を養ふに至りたる事實を證明するものと解釋せらるゝのである、實に自然は善惡兩方に於て數限りなく多くの材料を用意し、進まんものは進めそむくものは強はずと云ふ態度にて夫々の生物に對して居るので、此の際獨り子供の如く愛らしく子供の如く無邪氣なる性質の原人のみが能く此の自然の手にすがりて其の教育に身をまかせ以て其の材料によりて發達したものである、即ち自然が取て善のみを進むることをなさず惡のみを強て排斥せず甚だ鷹揚なる方法によりて之を育てたので、人間は生物中の大僧正の如く多くの動植物を歸依せしめ或は己が家畜とし或は己が作物として之を利用すると共に、色

々の苦心からして自然に腦の組織を緻密にして以て今日の如き高尚なる教育をも受くるに適應する様に至らしめたのである、即ち切言すれば自然物は神が人間を教育する唯一の教材である、故に幼稚園を設けて原人にも等しき子供を發達せしめて行かんとするにはどうしても此の神の教材を取らなければならぬ即ち自然を紹介せなければならぬのである。

そうして此の目的を以て園圃に栽培すべきものを擧ぐれば先次の如きものか、但し之は曾て學校園に栽培し兼て理科の實驗用に供せんとしてしらす、たもので特に幼稚園につきてしたるにはあらず、御寛恕を乞ふ。

- 一、すみせん 水仙 二、しらん 白及
- 三、すみれ 莖菜 四、けし 罌子粟



- 五、しやくやく 芍薬 六、ゆり 百合
  - 七、えぞぎく 翠菊 八、ひやくにちさう
  - 九、まつばばたん 一〇、ほうせんくわ鳳仙
  - 一一、さゝよう 桔梗 一二、あやめ
  - 一三、けいとう 鶏冠
  - 一四、せんにちこう千日紅
  - 一五、のうぜんはれん金蓮花
  - 一六、くさけうちくとう
  - 一七、こうわうさう紅黃草
  - 一八、ロベリヤ 一九、さく 菊
  - 二〇、あさがは牽牛花 二一、さくらそう櫻草
  - 二二、はたるぶくる 二三、うまのすいくさ
  - 二四、イペリス 二五、りんどう 龍膽
- 實用的のもの  
 麥、燕麥、莢豆、さとうり、除虫菊、藥用さぶら

ん、はぶさう、からんだいちご、ほーづき、ゆ  
 すらむめ、ぶどう、じゃがたらいも、なんさん  
 まめ、わた、  
 下等植物

つくし、すぎごけ、ぜにごけ  
 大きな水瓶を備へて

金魚、みぢんこ、ひどら等を飼養す、

### 實驗上の育兒 (ついで)

醫學博士 瀨川昌者君述

#### 臍緒と臍突

▲臍帶の處置 臍帶は一寸五分ばかり残して切  
 るものであるが、之れを取扱ふことは最も大切で  
 念に念を入れなければならぬ、此の臍帶は無菌ガ  
 ーゼカサルチルサンに浸した綿か左もなければホ

一サンに浸した消毒綿で餘り堅くなく、ト云つて緩くては落ちるから程好き加減に包み、尙其上へ綿を置いてズレないやうに注意し丁寧に取り扱はなければならぬ、ズレると無理に引張られて出血する故、臍帯の落ちる迄は綿帯が緩みはせぬか、ズレはせぬか、素の位置に正しくあるか一層此邊の注意を要するのです

▲臍帯と入浴　　デ臍帯は生後五日から七日の間に落ちる、其の跡は傷になるが夫れは前回に述べの通り傷として處置しなければならぬ、此傷へはカルチル綿かホーサンワゼリン等を付け再び綿帯を施して措く、併し生児には毎日入浴させる故湯を浴はせる時は此の綿帯を解いて浴はすものか、又解かず浴はすものか、孰れが育児法に適つて居るかを説明いたさう、總て僅の事でも其の方法

が前後すると飛んでもない大間違ひになることがあるから能く心得て置かれたい、ソコで此の綿帯は結へた儘解かず湯へ入れ、湯上りの後身体に湿りを拭取り、其の上で綿帯を取換へる手順にしなければなりません、綿帯を取換へるときも夫れで解いたらホーサン綿等で奇麗に手柔かに拭いて夫れが終つたら前の處置法に従ひ更に綿帯して置くが可い傷へ湯の浸入などは危険に陥る事が多いのです

▲まだ、油断出来ぬ　斯く傷の手當を施し居る内に十日間乃至二週間で此の傷は治癒して仕舞ひ、癍痕を残さず奇麗に治つて仕舞う、之れで一先づ臍帯は落ちて傷跡の心配も無くなつたやうなものだが扱是れではマダ、油断は出来ない、安心して居ると大變なことになる、其の大變なこと

は、何んなことであらうか、夫れは即ち臍突と云つて、能く小兒に有勝のことですが、是は何ういふ場合に起るのであらうか

▲臍突になる譯 此の臍突と云ふは臍帯の傷が癒つた當時小兒が非常に泣くとか、又は大便のとき息張つたりすると此種な状態になるのです故に是れを豫防するには臍帯の傷が治つたら臍の上へは消毒綿を當て尙一寸四方位に截つたボール紙を其上に置き爾うして縋帯を施すがよい、臍突になつてから直すにはナカ／＼精根に手敷を懸けぬと舊に復さぬ故豫め注意されたいものです

▲四ツ手縋帯 以上使用せる普通の縋帯に代ゆるに四ツ手縋帯と云ふのがあつて西洋では之れを用ひるさうだ、圖に示すごとく左右に四筋の紐があつて上部の輪の紐は小兒の首へ懸ける、四角な

る布は横巾二寸五分縦巾二寸位で此の布を臍部に當て、左右四筋の紐は脊へ廻して結び其結目の高くないらぬやう小兒の身体へ當らぬやうになさい、此縋帯は第一大小便が臀部から脊へ廻つても汚れが少なく、又縋帯がヅル事もなく緊乎として居る、併し私は餘り多く之れを使用せず普通の縋帯を用ひたが使ひ慣れると四ツ手縋帯は便利だと云ふから保育者は御實驗になつたら如何です

月不足兒の育て方

▲不完全な發育を補ふ 月満ちて出生た初生兒ですら其の保育法は大に六ヶ敷いもの、ですが親としては發育も良く、ムツクリ肥つた、健全な、無病息才な育て方は何人も希望する所です併し之には一方ならぬ苦心を要する事ですから況して月足らずの初生兒、即ち七月目か八月目で出生た兒

は、素より生來が虛弱ゆゑ、之れを健全に、普通の生兒と同じやうに育て上げる事は至難中の至難である、俗に「七月兒は育つ」と云ふが七月兒でも八月兒でも保育法に依つて決して育たぬ道理はない、故に月足らずの生兒と雖迎も育つまい抔と失望せずに充分手當をよくして生來の不完全な發育を補つて遣らなければならぬ

▲温度が唯一の力 斯く月足らずの生兒を育てるに尤も必要な手當は何んであらうか、之れは即ち生兒の身体の温度を保護する之れが唯一の方法である、一般の注意は勿論なれど聊かでも温度を冷却したら大變です、再び温度を高めやうにも容易に温まらず遂には其の兒をして不愜な目に逢はせなければならぬ、元來月滿ちて生れた普通の生兒でも温度を保護するの必要は前に述べた通りな

れど、尙其の温度より一層高くボカ〜と温かにしなければならぬ

三十

▲手落なく實行せよ 身体の温度を保護すると

一口に云くば誠に難作ないやうに聞えるが其の方法が實に難かしい、先づ第一に毎日室内の温度を一定させねばならぬ、冬なれば尙更のことです、次に室内の温度のみでない其の生兒を寢せる床の内の温度も何時も一定に温くなければならぬ、一時でも半時でも此温度が低くならぬやう、左りと又餘り高過ぎぬやう注意する其苦心は必ず一通りの事でない、夫れを手落ちなく實行しなければ月足らずの初生兒は決して育たぬと斷言して憚からぬのであります

▲湯に装置せる箱 西洋では斯ういふ生兒を育てるときは、箱の家を造り、箱の周圍へは温湯を

萬遍なく通され、詰り箱が湯の中へ浸されて湯の温度で箱の内部は温たまる装置ですが其の箱の中へ寝せて保育するのです、此の装置で湯の温度を終日も一定し置けば箱の中なる生児は少しでも冷る事なく安全に育てることが出来る、我國でも月足らず兒を保育するには此の箱の装置の積りで温度を一定に保つことを考へなければならぬ

▲温度の高低 扱此の温度は華氏六十五度から七十度の間を一定して保たしむるやうに、其の方法としては湯たんぽを床の中へ左右後と三ヶ處位入れ置き床へ手を入れてもポカ／＼するやうに温く室内も夫れに準じ火氣を用ひて温度の低下せぬやうに仕なければならぬ

生児の抱き方  
▲搖籃の大欠點 今度は生児の抱き方ですが、

何う抱いても宜いやうなもの、決して爾うでない抱き方は發育に大關係ある事と心得なければならぬ、西洋では生れた兒を搖籃へ乗せて揺りますが、これは生児が泣いて、機嫌の悪いときに用ひるのです、爾うすると生児が妙に泣き止んで機嫌が直りスヤ／＼と眠りますから揺られるので大層心持の良くなる事と考へられました、然るに近年に至り此の搖籃の大缺點を發見され、斯う云ふものへ乗せて揺るのは罪もない生児に魔酔藥を與へると一般で、生児が泣き止むも機嫌の直るも、又安眠の状態に入るも之れは大切なる腦を麻痺させて夫れが爲め知らず識らず眠りに就くのであるとの説が高くなり、斯んな缺點のあるものを用ひてはと孰れの家庭でも其の弊害を認め或る母親などは今更の如く身振ひして止めた程です飛んだ間違ひ

のあつたものではありませんか

▲抱いて揺る害 處が我國の育兒上にも此の搖藍の缺點に劣ぬ從來の惡弊があつて、夫れを氣がつかずに實行して居る、習慣上是非ない事ではあるが何か其丈は速に改良して貰ひたいと思ふ、デ夫れは生兒を抱いて揺る事です、誠に之ればかりは誰れも行ること、子守唄でも靜に謠ひ、抱いて揺つて居ると實に愛が籠つて優しい情の見えるものだが夫れが飛んでも無い大間違ひで搖藍で揺ると同じ道理であります、故に其生兒がスヤ／＼と夢に入るのも子守唄の興に入たるでもなく愛の心に感じたでもない全く腦が麻痺して、言は魔酔劑でも飲されたやうな心持になつて思はずまどろむのであります、斯く腦の危険をお咄し仕たら孰れの親達も自ら好んで生兒を魔酔させる者

はありますまい、抱いて揺る丈は直にお廢しになる事と信じます

三十二

▲ハンモックも同じ弊害 夫れからモ一ツ御注意して置きたいのは近頃大分ハンモックを釣つて夫れへ小兒を乗せて揺るのを實見する事がある、ハンモックでも用る位故此の家庭は先づ改良に御熱心な方と見受けるが夫れですら育兒上の誤解を來して西洋の搖藍に等しい弊害を遂行されて居る既に西洋では缺點を認め改良された事が今日日本でマダ實行されるのも即ち日本には適當な實驗上の育兒書が乏しい爲めで、西洋の育兒書が其儘譯され、原書は其後改正された點があつても譯書は改竄されずソツクリ元の儘で今日日本の家庭に求められ、誤りありと知らずに其説を信用し、遂にハンモックへ生兒を乗せて揺るやうな間違ひを

實行されるのです、ハンモックで揺つても抱いて揺つても搖籃に等しく育兒上の遺弊故直に改良の道を講ずるやう特に御反省を願ふのです

### 新年の重詰

石井泰次郎

こゝに記す所の、重詰の拵方は、普通料理の一種として、初春の客來に調ふべき仕方を示したるのみ、趣向のよろしきは、世間に多くありふれたれば、拙き組合せも、かへりて面白からん

#### ○羽子板かまぼこの拵方

蒲鉾の肉よりつくりて拵へる、教へ方は、教場にての事なれば、此にたれにても作らんとするには、有合せの薄鉾、或はハンペンなどを以て作るかた、手やすからん、ハンペンを、羽子板

(杉にて薄く一分位に、長さ三寸、握る柄の所一寸餘、合せて四寸餘の小さき羽子板をつくり置くべし、木具物師にあつらへて拵へてよし)の大きさに切方して、板の上のせ、美濃紙を細くたちて、三筋ほど、すぢかへに張付け置き紅にて、一面にぬりて、あとにて、紙をそつと取のけ、模様をあらはすべし

○紅は、細工紅の生上味を用ふ、又は口紅を以てぬりてもよし。

#### ○羽子の子 鴨の拵方

鴨をつくりて、肉を、能く切てたゝきて、丸めて、別に鍋に醬油と味淋を煮かへしたるに、鴨の皮を入れて炊て、味を出して、後に皮をとりのぎきて、あとへ丸めたる鴨を入れて、煮ころばして、味をつけて、取上て、鴨の羽のみじかき

所をぬきて、三本づき、つくばねの、はねの如くさして、よし。

○松風ざよりの拵方

ざよりを洗ひ、かしらをととり、はらびらきにして小骨を去り、鹽水にて洗ひて、箆にのせ、栗を切て、身をうねらして、申を二本さして、あぶりて、兩面やけ目つく程にやきて、醬油とみりんとを合せて、鍋に入れ煮つめたるを刷毛にて、魚の表にひきて、とりとして、其上へ、罌粟の實のいりたるを、ばらりと一面にふりかけて火よりあろして、板の上にて、申をぬきて、盛るべし、これは松竹梅の、三友の意をとりて用ひしなり、

○雪の梅の拵方

長芋(薯蕷)を、太さを一寸位づゝに切て、五角

に切て、梅花形とし(五角形にして、其一方の中心に切目を薄刃庖丁刀にてつけて、かどの所より、其切目までに、同じ庖丁刀にて、少し丸みつく程にひきて、五方とも丸く梅形につくるべし)湯鍋に入れ、湯煮よくして、取上て、砂糖を水にてときたるを、絹漉にしたるを鍋に入れ、鹽少しを加へ、みりんをも加へたるに、右のいもを入れて、ざつと煮て味をつけて、薯蕷を、皮をむきて、輪切に切て、湯煮して、取上て水を切て、馬尾篩にて裏漉にこして、浮粉といふこなをまぜて、砂糖と共に、煉合せたるにて、前の梅をつゝみて、蒸籠の中に入れて、ひして、切方して用ふるなり

○長芋一本につき、砂糖六十匁、水二合、みりん五匁、鹽二匁のわりにて煮たるがよし



皮かわこそする方は、右みぎの長芋ながいもの内うちにて、長芋ながいも一尺

ほどのかさにて、うき粉うきこな二十五匁じゅうごもんめ、砂糖さとう二十匁じゅうもんめ

ほどをい入れて煉ねりてつくるべし

○末廣ままひろ竹たけの子この拵しらべ方かた

竹たけの子この、皮かわをむきて、湯ゆ煮によくして、穂ほさき

の方ほうばかりを、二ふたつ切きにたてに切きて、細こまさ方ほうを

前まへにして廣ひろき方ほうを向むかひにして、きりかけては、切き

て、あとにてつらして、末廣ままひろの如ごとくして（此この仕し

方は易やすきことなれば色いろ々にしてさとりべし）鍋なべ

に入れ、砂糖さとう、みりん酒しゆ、酢すを合あせて、水みづ少し

加くへて、鍋なべに入れ炭火すみびにかけ煮にるべし

○砂糖さとう十匁じゅうもんめ、みりん二勺ふたすく五夕ごせき、酢す三勺さんすく、水みづ二勺ふたすく

五夕ごせきたけのこ、一本ほんのほさきだけの割わにてよ

し

お正月しやうげつと子供こどもの教育きやういく

東　基　吉

お正月しやうげつがきたといつて、別段べつだん違ちがつたことはない筈はず

ではあります、兎うに角正月かくしやうげつは物ものの新あららしくなる

時ときとして、子供等こどもらまでが、其様そのやうに信しんじて居ゐるので

ありますから、お正月しやうげつといふ月つきは子供こどもの教育きやういくにも、

大層たいそうよい機会きかいを興あててくれるのであります。

「太郎たろうさんは今年ことしからもう學校がっこうへ行く様やうになるの

だから、このお正月しやうげつからは、朝寢坊あさねぼうをやめて、吃ま

度七時どしちには起おきる様にやうにしますね」と元日げんじつ早々ささに言い

つて聞きかせて置おくと、確たしかに太郎たろうさんは其積そのつりにな

つて、七時しちじに起おすと、去年いまでの様やうに床とこの中なかでぐ

づん、いはなくなる。

「このお正月しやうげつで、年としが一つふえたのだから、坊ぼうは

きつくなる、朝起あさおきる時ときには、もう去年いまでの様やう

に「衣物をあぶつてくれなくちや」などはいはな  
いのだよ」といへば、夫れで以て今迄の衣物をあ  
ぶつて着せた習慣も取つて仕舞ふことが出来ませ  
う。

子供を教育する上に、改めてやりたいとは思ひな  
がら、今迄改めさせる事の出来なかつた悪い習慣  
は、お正月といつて、子供ながらに萬事新になる  
と考へるその觀念を利用して斷然改めさせる様  
にしたいと思ひます。

夫と同時に、吾々に取つても、子供の教育に付き  
て、したいとか、已めたいとか思つて居て、實行の  
出来なかつた事を決行する機會だと思はれます。

### 子供の玩具

一度に澤山やるのがよいか、少しづつ與へるのが

よいかと申すと、新しいものは一度に澤山やら  
ないで一品づゝの方が勿論宜うございます。そし  
て夫が厭いた時分に又一つといふ風にしません  
と、一度に澤山やれば、子供ながらにわれこれと  
迷つて仕舞つて、どれをも十分弄ばないでこは  
してしまいます。そして、舊いのく〜とだんく〜  
玩具箱にたまつてきます、子供は其中で一番氣に  
入つたものを取り出して弄びます。

精巧で従つて代價の高いものは、子供に必要があ  
りませぬ、こんな品は金のある人が、子供を可愛  
がる自分の心を満足させる丈けに適當したもの  
で、子供に取つては何の見分もつきませぬ、子供  
の方からいふと、粗末でも珍らしいのを何度も頂  
く方が、無論よいのです。

武力細工の電車は、宅の子供が、何よりか一番に

歓迎する玩具ですが、私は買つてくるとすぐ、つき立つて居る旗をとり外したり、其他の角や隅などを折り曲げてからもたせます。間違つて手でもつき通すと大變ですから。

これは友達の話ですが、其方のお子がまだ小さい時分、色の付いた玩具は、一旦湯で以て洗い落してからもたせるといふことでしたが、これも、子供が何でも口へもつて行く時分には適當な注意だと思ひます。

二歳から三歳位になりますと、繪本だの繪はがきがよい玩具になります。夫から暖い時分だと砂をいぢらせること、これは椽側へござでも敷いて、ボールの明き箱か何かへ砂を入れてやつて、其上へ置いてやれば、そこで獨り手に遊びます。又幼稚園の積木は、寒い時分に宜しうございませう。

これは、九段中坂下の佐藤といふ所に賣つて居ります。

### 電 車 と 子 供

そら電車の遊び、そら電車の玩具、そら電車を描くといふ風で、如何にも電車は子供に及つて面白いものと見えますが、實際の電車に向つては、十分に注意する様に、言ひ聞かせておかねばなりません。

今から申すと、もう昨年のことになりますが、附屬幼稚園一の組幼児の宮川千枝子は、暮の十二日、幼稚園からの歸りがけに、電車にひかれて、見るも無残な大怪我をして、とうとう其日に亡くなつて仕舞ひました。何方がよい悪いのといつて議論した所が、もうこうなつては仕方のない話です。

から、學校や幼稚園の往返は勿論のこと、道を歩くに道草を食つて、側見をして歩いたりせぬ様、殊に、東京の様な所では、電車や馬車に氣を付けて歩く様に、家庭の方でも學校幼稚園でもかねて、誠めて置くことが大切なことであります。

貞一の日記

(承前)明治廿六年五月  
(拔萃)卅一日生男兒

その母

七月廿六日 昨日の様に、庭に出て、ポチに繪本を見せ、今日は問ひにして、猫どれ、モンキーどれなどいふ、ポチは知らぬ顔して、其所にうづくまる、オツキ〜といつて立たせて答へさせようとする。

何故か、同じ言葉を重ぬる時は、後の頭吾を省く文法を、貞一ひとり定め居るもをかし例へば

ゴメン略(ゴ)メン、カメ、チク略(チ)ク(蚊ガサスト)カミ略(カ)ミ(噛ム)ト

「コノ」といふ辭を覺えたり、

アリメ、コワ〜(蟻コワイ) ホーセンカナ

といふ、

マウ(馬上)サンとツナグ(物を繋ぐ意)といふ事を覺えたり、

七月廿八日 母と水遊びして居りし時、父も傍に来て、石鹼をとかして、管で泡をふくらせるとばして見せしに、こわがりて、母にすがりつく、それでも面白いと見え、もつと〜と催促す、夜おそく、隣家の中村さんへ、人たづね来て、おくさん〜さんでございませといふをさへ、

おこさん〜びん〜とまねす。

七月廿九日 安田さんの机の上に、菊の花をいけ

たり、それをさして、ヤーチャン、イ、エとい

ふ、安田さんがさわると否といひしを覺え居り

しなり、母の髪を結ふ傍に遊んで居りしが、く

せなをしの、金だらひを見て、カーサナイ、エ

といふ、前のと、同じ意味なるべし、下痢二回

七月卅日 ツラ、ホシ、ヨル、マツク、ネンネと

いふ、昨夜、星を見て後、ねむりし事をいふな

らん、

七月卅一日 今日も、二回はかり、下痢せし故、

父と小原先生の許に行く、

八月二日 朝食後吐く、下痢三回

母と小原先生に行く、牛乳を減すべしと、命ぜ

らる、

朝 一〇〇瓦 おやつ一〇〇瓦  
晝夕なし 粥も魚もすつと減す

八月三日 朝の中は、元氣悪しかりしも、午飯前

には、元氣よくなりて遊ぶ、

便通一回(不消化)

八月四日 きれくながら、君が代を、初から終

まで唱ふ、

コレといふて、指す事を覺えたり、

横になつて、外をながめ、アツカ、テンキ、と

いふ、アメヤンダといひしは、二三日前の事な

りき、便通一回(少し柔し)

八月五日 元氣はよろしきも、顔色は悪し、父と

玉翠館へ寫眞うつしに行く、二度も、三度も、

とられし故、終にはオシッコといひ出す、

然しこれは、止めさせやうとする方便なりき、

夜眠る時も、全じ手段にて蚊帳の外に出しても

便通一回（硬く肛門より少しく出血）

八月六日 ガラスの切口の、青きを見て、蚊帳ア

ヲといふ、かやの様に青しといふ意味ならん、

今日より獨りにて、ヒを持って粥を喰べる、

八月七日 母此の二三日 氣分勝れず、横になり

居りしに、カーチャン、キークワライといふ、

一昨日母か云ひしを、覺え居りしなり、

モーチ、カヒ〜といふ、二三日前、牛乳の配

達おそかりし故、もらひに出かけし事を思ひ出

したるなり、

電車の玩具をもつて、チン〜ゴ〜、ゴケ

ンチヨ〜といふ、便通二回

八月八日 小原先生より、牛乳を四〇〇瓦に増せ

と仰せらる、

少しく元氣悪し、

八月十一日 母と幸田様へ遊びに行き、二階の、

梯子を登り降りしてよろこぶ、

両方、二つ、イツシヨなどいふ事を覺ゆ、數の

考ふこりしならん、

### 子供らのはなし

何れも幼稚園の子供、可愛い盛り、の四つから五つ

六つ位までの男の子や女の子やが、先生をつかま

へての、家であつたこととしたことのお話、中には

想像で造り出して、よい加減のことをいつて居る

のもあらうし、別にこれといふ節もないのではあ

るが、集めて見れば、さて彼等の思つて居ること、

して居ること、さては家庭の風なども見えつるま

ゝに、かくはしるしぬ。子供は、東京の中流以下、

まづは下層の上なるものなり。

▲神谷隆之助 先生よる夢を見ました、池に鯉だのたひだのが、たくさんおよひで、其池のまはりに、狐がちやんくを着て太鼓をたいて、おどりなどして居ました。

▲田中清太郎 せんに、餅草摘みに行つて、難せん船を見ました、難せん船と云ふのは、船の中に、水がたくさんはいつて、しづみそうになるのです。

▲野上孝治郎 象が鳥屋へ鳥とりにきたものだから、鳥のわたまをやつたら、象が怒つて鼻をかけて、にげようと思つたら、象がのろいものだから、なか／＼にげられないで、其内に人が来て、鐵の棒でぶつたら、死んでしまいました。

▲齊藤はま 猫がゐていつか井戸のまわりを廻つていて、おつこつて、井戸屋が来て猫をとつて、あきだなのうしろへ埋めてしまつたの、其時おか

しを買つてたべたの。

▲尾崎鐵太郎 もうせんにね、お春さんの兄さんと明神様へ行つたら、たちんぼうがいて、棒をかんばんだつて、ねん／＼ようと云つてゐました、そうしてお相撲しろつて云ふたら、東西なんて云つて、わざとこるびました、それでもつておまわりさんにしかられました。

▲廣田のい あたしと五郎さんと直次郎さんと三人して、直ちやんがあかんばんで、わたしがお母さんで、五郎さんが兄さんだつて、おばさんごつこして、ござを敷て遊びました。

▲加藤某 けさ、私がある時、お魚屋さんが来て、おばあさんがなまりとさしみとでは、どつちがい／＼つて云ひましたから、どつちでもいひつて云ひましたら、おさしみを買つて置いてくれてお晝に

たべます。

▲吉澤某 おちいさんとおばあさんとあつて、お婆さんがつうらと鮭と持つて、どぶをまたごうとして、鮭をどぶの中へ落してしまつたら、お婆さんがなさない事をした、なさない事をしたつて云ひました。

▲野上某 どつかの勸工場に行つたら、大きな綺麗な孔雀がいました。南京鼠が車屋の水車みた様の中へはいつて、くるくまわしていました。

▲大石某 田舎の子は、朝お茶碗の音がすると、すぐに起きるつて、お母さんが云ひました。

▲野上某 お父さんが御酒が好きで、ぬゝ子だものだから、瀧の水が御酒になつてしまつたの、子供がお母さんに、何がすきですと云つたら、花がいゝつて、それで花をたいへんそこに植て、御馳

走をたくさんこしらへて、べんく三味線ひいて、お母さんに見せました。

お魚を、お父さんが買つておいでと、云つたのに、お魚がないものだから、こまつていたら、鳥がかあゝゝつて飛んで来て、お魚を落していつてくれたの。

お使に行くのに、お父さんが、下駄はいて行つて、お母さんが草履はいて行つて、しかたなく、かたちんばにはいて行きました。

▲某 先生、昨日うちへ歸つて、今日は私たちの、幼稚園へ初めて、はいつた日で、それで広い庭で遊んだり、孔子様を見に行きましたつて、話したら、お母さんがそれはよかつたねと云ひました。



新 玉

眞宮起雲

瑠璃の扉にわけのいろ榮えはのぐと河面かけて  
初日はのぼる

天つ女がとしほぎ歌の譜に合せ五十鈴かはみづせ  
ゝらぎゝよき

かきぞめに題するひとの一人なくて淋しことしも  
野に果てん哉

河の瀬に若水汲むと詩にやせしわがふもわにもゑ  
みふくまるゝ

繪ぎぬのべて御題うつさん窓ちかくはつ日うらゝ  
に梅香奇しき

詩に榮えむのぞみのいろか初わけのくれなゐなが  
る河波のあや

ゆく水に年の光りのほのめきてわが大はしま永久  
にきよかれ  
\* \* \* \*

短歌募集

▲課題 随意▲べ切 毎月末日

▲發表 本誌上▲賞品 三光に粗景

▲選評 眞宮起雲

▲投稿 用紙随意左記の處に送らるべし

但添削返稿は往復葉書又は印紙封入の事

伊勢國白子局區内みとり短歌會

わが世 (秀逸)

○ 飯塚 曉 霞

われにかへり涙拂ふてみあぐれば片われ月のいま

おちんとす

くちづさむ我がうたふるびわれやせぬかくて我世

の暮れ果ん哉

○ 八重子

秋のあめ細うふる夜をともしなくしづかにおもふ

あめつちの歌

○ 伊藤芳江

額ふして祈りさゝぐるわさわけや靈の香はなつし

らぎくのはな

○ 金丸錦川

あしの花白うふけたる霜の夜を名しらぬ鳥のきた

に鳴きすぐ

○ 志雅子

許しませこの身はやせてさまよひの塵のちまたに

うたもだになき

○ ○ ○ ○ ○

フレーベル會俳句端書集

一、課題 常季雜吟一人十句以下

一、締切 毎月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品 三光には繪はがきを呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌 購讀者は何人にてても投吟する事

を得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨

意)住所氏名雅號を明記し必らず左の

名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛



人、歌讀まじ人は見へず大根引 東京ゆかり子

追加

鹽野奇零

益良雄も太刀解きて屠蘇の膳  
敵味方先づ打ちとけて御慶かな  
凱旋に國威の高し初日影

漁夫

雨峯生

夕日くまなく彩りし  
影流しゆく鳥川  
長き影をば地に描き  
家路に向ふ思ひこそ  
細き煙は釣り糸の  
浮世の波はしづかにて  
例は峰の白雲の  
洞口にかへるそれなるか  
芥子生えゆきて限りなき

毛武の峰の濃紫  
岸をたどれる漁夫一人  
俚歌にわか身をまかせつ、  
げに「詩の使」歌の神」  
それにも似たる生活も  
今日もくれたる樂さを  
無心ながらに湧きたちて  
無心といへどひたすらに  
莫實を結ぶ道理を

無邊天地の擴かりん  
柴の破垣、妻もなき  
た「自然」のふところに  
深き蕪なこほかん  
四邊はやゝに冷雲の  
しづかに岸邊さすりゆき  
礙りなき身はすがくと  
觀喜の光眉にみゆ

通ふ運命と思出て  
我家わびしき獨住居  
願ふ幸こそ天地の

今日はくれぬくれはてぬ  
襲ひきたりて川水は  
音も淋しくなりぬれど

あがきもはやくなりゆきて  
話ふ小うたの音もやみて

胡山山人

雪の夕べ

清めんものと久方の  
天つ御空を立ち出で、  
雪は下界にくだり來ぬ。

清き心を白妙の  
色に見せつゝ野邊山へ  
塵のちまたもいとひなく

四十六

つもるぞ雪のまことなる。

見渡すかぎり眞白にぞ

かゝりきわたる銀世界

賤が伏家もたちまちに

玉の臺となりけり。

紅葉のにしき影もなく

さびぞはてたる梢をば

吾が物顔に非時くも

六つの花をば咲かしけり。

向ふに見ゆる高き丘

前を流るいさゝ川

丘はうもれて川はしも

碧玉なせる色さむし。

しばしたへなる此のさまに

みとれてよれる書の纏

手を拱めれば我が胸に

いとくさくさの感あり。

ふりつむ雪はへだてれど

貴賤貧富のそれ々に

見る人々の心こそ

千々のすがたにかはるらめ

雪にはえある黒羽織

綿あたりかく着る人は

玉の臺に酒くみて

自然の美をやめつるらん。

すきを極めし床の上に

たがやす賤のいたづきも

はた織る子等がいとなみも

知らでふすまや重ぬらん。

寒さを知らぬあて人に

見せばや賤が麻ぶすま

のきもる月をしも氷る

袖にやどして寝る様を。

軒端かたむき壁やぶれ

ふせぐにかたき木枯の

うき世の風も身にぞしむ

寒さにむせぶ者もあり。

めぐる因果が世の中に

父は車のかちとりて

夏の日長も冬の夜も

足にひまなきくるしみな。

母は水仕にやつれては

日毎夜ごとに世渡りの

からきに泣くも知らずして

こま竹馬とうかれつゝ

富貴にほこる人の子の

すがたを見つゝ羨みて

われにもかくとうなる子の

せがむ心ぞいぢらしき。

はぐゝむ親はありながら

うゑに泣かするみどり子の

れ入りし顔をながめても

つらきは人の世なりけり

昨日はことに紛らして

かへしやりたる市人の

今日を限りとはたらむを

如何にいひときかへすべき。

しばし浮世をよそにして

ねむらむものとまるとるめば

夢のうちにもからき世の

はかなき影ぞうつりぬる。

ましてや雪の今夜など

親は子を抱き子は親に

いだかれつゝもたへかぬる

さむきふすまになきぬらん。

\* \* \* \* \*

あはれたへなる六の花

浮世の塵は清めずも

飢寒になやむ世の人の

心痛ますなとこしへに。

アメリカのうらだな

朝露生

うらだなとは云へど四階立ての借家、千弗や二千

弗は銀行にあづけて置くのですが、悲しやこの國

にてはかくてもジャップの九尺二間、人なみの交

際もできず、その日その日の業務を漸く滞りなく

すましてゆかるゝに過ぎぬ身の上、この間に何等の詩材も何等の雅趣もありませぬ。

されど向ふ三軒兩隣り、悉く白人である中に、吾は日本のつぼすみれ、今に見よ自動車を驅りて公園の中に縦横にゆき、する身ぞと、意氣中々可愛いではありませぬか。知れる一家を材料として拙き筆を弄するにいたりましたのは、異邦にさけるこの一野艸も、花あり葉ありまた風情あり、その異彩ある家庭のありさまを讀者に告げまいらせたいばかりであります。

父君起さるのだよ、御前はまだ寐臺に居れ、オ、善良女兒々々々と云ふて居るうちに、母君のそばにて泣く子、搖籃の中にて菓物々々とさげぶ子、三界の首枷は悉く女兒にて、ふる里にて云ふなる簞笥盜賊、たのしくてまた苦しきゆく末も、わが

ものと思へば軽く身も動き、夫はほど近き店にて終日のはたらき、妻は下宿屋の主婦とも料理番と

も、また小使ともなりて、雲にそびゆる舊教の寺塔より響さわたる鐘によび起され、次の街の音楽堂の音のやみしころ、漸く室に鍵をとぎし、一年のながさも夢の間に過ぎて、ことしは六回目の新年をこの國に迎へしとか。

朝飯の仕度できしころは、三人のいとし子にもそれそれ衣裳をつけてやり、うしろにかくるボタンいくつ、靴下よ靴よと乳粥のさめぬ間の、早業長女は七才の可愛き足どりにて四階までのぼりゆき、室々の前を鈴をふりてかへり來る役、あとの二人は伯父さんよ伯父さんよとて、誰かれの厭なくかんとぶして喜ぶあどけなさ、こればかりは浮世の商人の企で及ばざる景物、情愛といふものに飢えつ

ある同胞はこの宿にきてはじめて家らしき感あることのでございませう。

朝飯のあとかたづけも慣れたることゝて、またいくうちにすまし、メーキベッドヤ部屋の掃持、洋燈の世話まで滞りなく、晝の仕度の前にと洗濯ものに手をかけて、いそがしげに働くは子だちの所謂マ、ア、まどごしに隣れる碧眼の女とかたる言葉、ペンもつことは知らぬ身も、耳にて學べる音調だしく、はんに子あなた、毎日いそがしく、子だちは世話ばかりやかして、何のたのしみもありません子。芝居ですか。先月一度ゆつて見ましたが、面白ふでござんしたよ。子だちをねかしてソツトゆつたもんですから氣がゝりで腰が落つきませんでした。今日は鬘斗ですか。わたしは洗濯よ。男の子なら世話がやけぬが、女の子は殆んど毎日洗

濯してやらねばならず、子どものうちからオシャレを習はせるやうなものです子ハ、ヲホ、ハ、ハ、と鸚鵡の舌のはこび面白く井戸端會議にあらで窓端會議がはじまりし時、俄然子どもの泣く聲、シヤポンの泡を拭ひもあへず手をふりて階段に出づれば、マンマー、あのボーイはミーをぶつたよとてまたなく。さうか悪いボーイだ。御前は日本のガールだよ、あんな毛塘に意地目られてたまるものか、オー、ノーデイボーイ、覺えて居れとさけんで見ても、影も形も見へず、泣く子をすかして戸をとぞせば、ステツプの下からノコノコいで來るノーデー先生、戸のそばにてアカンベイ。今日は不思議に三人とも仲よくて、喧嘩もせずに遊んで居ると見れば、其筈、一人泣いてきた御影にてあとの二人も落花生の御相伴、たべたあとは



まゝごと可笑しく、空箱を椅子として長女はマンマー、三女はベビー、そこのテーブルをそのまゝ、ミシンとして瓜音にてカチカチやつて居るとき、戸を叩くは二女、入来といふて立ちあがるは小なるマンマー、ホロー、ハローと云ふて手を握るところ、流石にこの地に育ちし者の如し、されど客は話の種ももたず主人は外の挨拶も知らねば、バイバイ、バイバイと云ふて辭し去るのみです。午飯もすみ晚餐近くなれば 歸り来るババア、ババアよ、ババアよとて右から左から、また前からすがられて、苦勞の塵も殘なく落ち、バナ、に珈琲に一家笑ひ興するところ、こゝが生命の源でございませう。

はじめ夫婦のこの國に來りしときは、男は遠きフランスの農園に働き、女は所謂毛唐の家の下婢と

なり、朝より夜までこきつかはれ、一年ばかりの間泣いて枕につかぬことはなかつたが、何日ともなくそこにも慣れて、農園働きを資本とし、さゝやかなる店を開き、その利益にて下宿屋をはじめ、今では毎月七十弗の借家料を拂ふのみか、小道具の類日に月に殖えて、子だちの日曜着物も余り恥かしからず、貯金も子だちの身の丈と共に月々にのびゆくとのこと、故郷に錦をかざるもこの二三年のうちなるべしと、同胞間の噂とりどりでございませう。

アメリカの裏店も大八州の國にかへりては、中産以上の生活、呉竹の雪に折れふす心だになくば、しばらく家庭をアメリカにうつすもまた一興でございませう。いくら働いても金の儲からぬところに居て、ひつかしき姑さんの御機嫌をとるより、こ

の國にての難行苦行、山吹の花さく春にかへりきては姑さんもホクホク喜びて一家とこととはに雨もなくまた風もなくサンニイステートと自慢する加洲の天地と等しくなるでございませう。

裏店の紹介かくの如しだとサ。日の本ならばアバヨと云ふべきところ、この半熟のジャツプガールをまねてバイバイ。

(完)

## 幼稚園と家庭

### 幼稚園から家庭へ望むこと

東 基 吉 述

#### 附添人送り迎へ人のこと

附屬幼稚園では時々先生方から附添人を集めて、子供の躡けや取扱ひ方に付いての大體を話す様になつて居ります、これは至極結構な事と思ひま

す。今日で下婢や子守りが教育の考のない事は普通です。今日で下婢や子守りが教育の考のない事は普通のですから、彼等のために、折角幼稚園での心盡しの躡け方も丸で水泡になつてしまふことのあるのは、悲しむべきことであります。家庭の方でも、此點に心を用ゐられて、時々子供の教育上注意すべきことなぞに付きて、下婢や小守りに教訓せられるといふ様になさるなら、幼児教育上誠に都合のよい事と存じます。そしてこの事は、たい自分達の子供の爲のみならず、一方には又傭人の教育といふ點から、實に彼等の將來の幸福の一つとなる事なのであります。

夫から送り迎へによさず人は、丸で子供同様な不注意な小僧や小守りでは、別項記載の様な危険を避けさせるなどいふ事も覺束ないのでから、なるべく譯の分つた確りした人をよこしになること

が必要であります。

### 子供の道具に名前

それから、幼児のお辨當とか手巾とか帽子とか其他  
子供の持物へは、すべて名前をつけて置くことが、  
最も幼稚園の方で望ましい事なので、夫が爲めに、  
置き忘れとか紛失の場合などには、幼稚園の方で  
も手数が省ければ、子供にとつても、まことに仕  
合はせな事になります。

### 手巾は必ず持たせること

幼稚園へくる時許りではございません。子供には  
始終手巾を前掛のポケットへ入れさせておく  
か、帯へさげさせて置くかして、持たせておきた  
いのであります。殊に幼稚園の様な大勢集まる所  
では、例令へ皮膚病等は、どれ程注意してゐるに  
しても、便所などの共同の手拭はなるべく使はせ

ない様にしたいものですから、是非とも持たせて  
置きたいのであります。

### 幼児への談話の仕方

和 田 實

前號には、女子高等師範學校で取調べられた、幼  
児への、談話の種類や、其教育的價値に就て、有  
益な説明がありました。が、それに就て、私の感じ  
た事を少し書きたいと思ひます、殊に説話式を用  
ひて、幼児に御話をなさるときの、話の仕方に就て、  
思ひついた事を述べたいのです。

一 説話者の意氣 幼児は、社會心に動かさるゝ事  
の、最も鋭いものです、殊に談話を聞く時などに、  
其話す人の意氣が、沈んで居つたり、厭氣に見え  
たり、などすると、もう直に、いやになつて、聞

かないものです、それですから、幼児を對手に話  
す人は、半分は確に「子供になる」と云ふ心持が  
肝心だと云はれて居る譯です。

二次には手振と身振 とがよく話に釣合はなけれ  
ばなりません、口に話して居る事と、手や身体の  
動き方が、一致しませんと、傍で見て居ても不釣  
合で見苦しいものです、例へば、口で「鼠がちよ  
こくとかけて行つた」などと云ふ時に、下つて  
居た手が急に空中を前方に飛出したり、鼠のある  
さそうもない壁や黒板の面などへ、手首を走らせ  
て鼠のかける様子を見せたりなどするのは、觀察  
の鋭い子供の中には、間違を殘す種であります、  
若し又鼠の走る所を實際に見た子供ならば、必ず  
先生の鼠は妙な所を走るものだ」と思ふかも知れ  
ません、何故と云ふに一体鼠と云ふものは、鴨居

の上や室の隅など、務めて縁を通るもので、暗き  
室でもなければ、平面の眞中を安らに走るもの  
ではありませんもの、此外、話に勢を付けやう  
と思ふて、無暗に手や身体を鋭く動かして、子供  
を刺戟し様とする人があります、之も有害だと  
思ひます、例へば、「こんなに大きかつたのです」  
と、兩手を擴げて見せるに、膝上の手が急に勢鋭  
く左右に突出するなどです、こんな時には、其話  
の性質上、當然持つて居る丈の勢があれば、子供は  
大變快く感ずるものですのに、餘り勢のはげし  
いために、話よりは眼の方へ驚奇的に注意を奪は  
れて、肝心な「大」と云ふことの想像は、容易に  
起らぬ事になります、一体子供への話は、一々想  
像力を働かせて居るのですから悠然と落ち付かせ  
なければ、充分には働きませんのに、不意な事を

して注意を亂してはいけません。又話して居ると、手や身体の動き方が、全く合はぬ事があります。話す人は自分が紳々として餘祐ありとでも、見せ様とするのですか、話以外勝手ないたづら見た様な事をして居る人があります、是も悪ひ御手本だと思ひます、丁度子供にいたづらと云ふものは斯う云ふ風に出来るものと云ふ手本を、示す様なものではありませんか。

三言語の迷度 上手な熟練した人が、子供に話をして居る所を見ると、言語がゆるやかにそろ／＼と出て来て、子供には、一語／＼悉く頭に入る様に見え、一語は一語と歴々と反應が、子供の顔色や眼付に表はれて来ます。然るに、此邊の具合のわからぬ人がするのを見ると大人や大きな子供に云ふ様な、早言葉ですから、話が駸々と進んで行

つて、涉は行きますが、其代り話した半分も、子供の腦裏に繰り返されず、従つて愉快を感じさせる事が出来ません、一体、談話の價値は、嘗て聞かれた事を、其儘再び腦中に繰返さるゝ所にあり、心的諸作用を促進する上から云つても、言語の能を進める上から云つても一度耳から入つた事を、其まゝ、腦中に繰返すと云ふ事は、大層利益ある事です、且又子供は之を大變愉快に感ずるものです、此同一的復現が容易に行はるれば行はる程、愉快も一層であり、従つて教訓的効力も、深く染み込む澤です。例へば、舌切雀の話が、繰り返さるればさるゝ程、動物虐待の惡む可きことや、老翁の愛す可き温徳などが、深く染み込むと同時に、諸種の心力は練習を重ねて、其働き容易となり、其用語は暗記せらるゝ様になるのであり

ます、又談話の理解と云ふ方から云ひましても、言語は大きな人に話すより、餘程ゆつくりでよい譯です。何故と云ふに、一体子供には未だ概念と云ふものが、充分に出來上つて居りません、一つの名詞又動詞も多くは具體的のもので、馬とか牛とか云ふても、吾々ならば、直に其概念又は概念の符號なる文字などを、思ひ浮べて、夫れから夫れへと、速に思ひ廻らすことが、出來ますが、子供は馬と云はれた時、先馬を具體的に考へて、自分の尤もよく記憶する實物を思ひ浮べて、待つて居るものです、次に牛と云はれると、同様な事をして居るのです。夫れに子供の意識と云ふものは、範圍の頗るせまいものですから、斯様に手おつくりな概念が、速に呼び起されては、入り込む餘地が、ありません。故に言語の速度をゆるめて、

五十六  
 不必要な概念と新概念とが、新陳代謝するに、適當な時間と與へなければ、逆も話を理解することが、出來ません。

四言語の種類と其數 子供へ話をする人は「半分子供になれ」と云ふことの、他の一の理由は、言語の種類が、子供の範圍を脱してはならぬ事を戒めるのです。動もすると、大人は自分達の、平常用ゆる言語の數々を、無暗に遣ひますが、此云ふ事では、話の全体がたとへ悉く注入されたとして、逆も、容易に腦中に復現することは、出來ません。例へば「大きな人がありました」と云ふ可き處を、「雲衝く大きな人がありました」と云ひ、「きれいな大變きれいでした」と云へば、充分な處を、「其きれいなことは、筆にも言葉にもつくせないくらいです」などと、云ふものだから、却つて幼

兒には「大きい」とか「きれい」とか云ふ看念は、  
 わからぬ不思議な形容詞のために、其意義を曖昧  
 にされて、しまします。そして遂には、話の全体  
 が明瞭に把握されないで、極めて断片的になつて  
 しまします。さて斯様に言葉の種類に、氣を付け  
 て、其子供相當の言葉のみを用ひて話す様にする  
 と、言葉の敷は自然限られて来て、速言葉で澤山  
 云ふ必要もなければ、忙がしいせわしい話振をし  
 て、せかしくした風を見せる必要もないのです。

雑 報

在佐賀の知人より、左の募集廣告を贈りぬ。一年の計は元旦に  
 在り、年の始に當りて貯金の勘の歌の想を練ると共に、其方法  
 にも思なめぐらすに至らば、よし一等賞の金側時計を得る能は  
 んにしても、今年一年の家政の上に確に損にはならざるべし、  
 若し夫れ幸に選に當りたらんには、重ねくの利得ともなるべ  
 しと云爾

(記 者)

懸賞募集廣告

- 一題、貯金の勧め歌
  - 一文体 新体詩
  - 一字数 貳百四十字以内
  - 一締切期限 明治三十九年一月末日
  - 一賞品
    - 一等 金側懷中時計 壹箇
    - 二等 銀側懷中時計 壹箇
    - 三等 据 時 計 壹箇
- 一懸賞當撰の歌は斯道知名の士に作譜を請ひ唱歌  
 として一般貯蓄思想涵養の資料に供すべし  
 一答案は肥前唐津郵便局内山村直太宛の事  
 但答案接受の上は即時領收の證を發す  
 一當撰發表は締切期限より二ヶ月以内とす  
 明治卅八年十月廿三日

肥前唐津郵便局長 山村 直太

●參考

貯金新金言懸賞募集當撰披露

過般貯金新金言懸賞募集の處應募總數四千三百二十五通に達し其撰擇方を法學士石橋忍月君法學士川村竹治君文學士三根圓次郎君に依頼せしに左の通り撰擇せられたり

明治廿六年五月十五日

唐津郵便局 山村 直太

壹等賞

取る思案より使はぬ思案

佐賀縣神埼町 松尾 正君

貳等賞

貯金の金として別には無ぞ

佐賀縣三養基郡基山小學校 島 たら子君

參等賞

溜めて溜らぬためしなし

群馬縣佐波郡豐愛小學校 佐々木清松君

貯金は義理の借金と思へ

佐賀縣西松浦郡波多津村 天野 房太郎君

多く取るより少しく殘せ

長崎縣西彼杵郡三重村 東 清 七君

貯金の家に饑饉なし

佐賀縣神埼郡千歳小學校 深川 忠次君

五厘の切手も積めば千兩の手形なり

長崎縣嚴原田淵町 土井 春兩君

神戸通信

神戸市神戸訓盲院 平 岩 繁 治

一 細民と授産場。神戸市には、随分貧民が多い、

此れ等の細民の多くは、適當な職業もなく、

只落葉木片等を捨取するに止まる者もあつて、

自然不良の徒を出す恐れがあるので、其の當路

者も、種々心配しつゝあるのですが、此のまま

で何時までも、等閑に看過したならば、彼等と



一般市民との、上下の區別は、甚だしくなるのであらうと、思はれるのである、従つて此れ等細民兒童の爲めに、學校の設備も、到底完全望むことが、出来ないもので、新に授産場を設けて、市の救恤部が、其の經營の任に、當るとの事である、斯様にしたならば、漸次思はしくない風習も、矯正することが、出来るであらうと思はれる。

一 兒童保育所の將來。此れは出征軍人遺族の子供を集めて、保育して居る所である、此の事業は、神戸市婦人奉公會の附屬事業であるから、奉公會と運命を共にすべき者であるが、尙ほ出征軍人及び一部労働者のために、此の事業繼續の必要があるので、當局者に於ても、夫れ／＼調査中の由なるが、經費の都合で、數箇所位は、

存置するとの事である。斯る事業は、文明國の花であるから、余等は是非共、其の存置を望むと共に、尙ほ益々多數の細民兒童保育所の設立を祈るのである。

一 圖書館設立音樂會。十一月二日神戸女學院の生徒が、學校内に圖書館を設立せんとて、其の

基本金を募る爲めに、企てられたのである。別に、新曲と云ふ様な者はなかつたけれ共、女學生の企てとしては、結構であつた。

一 盲啞の子供と普通の子供。東京に遊學中も、感じた事であるが、普通の子供は、不具可憐な不幸なる盲啞の子供を見ると、一段下つた、虫けらでも見るが如く、卑んで居つて、或は馬鹿にしたり、或は顔つきをしたたり、手つきをしたります。尙ほ甚だしきに至つては、悪口をさ

いたり、邪魔をしたりして、迷惑を掛ける場合が、少くはないのである。東京と比較して見ると、我が神戸市の方か、一層であると思ふ。これは只に子供が悪いのみならず、一つには教育の不完全を、示してゐるのであるから、小學校教員の責任も、ないとはいはれないのである、特に此等兒童の不徳を、矯正するので、幼稚園時代が尤も適當であると思ふ、幼稚園時代の子供は、人間の一生中一番同情心にも富んでゐるし、又愛の力も強い時であるから、此の期を逸さず心を用ひて、盲啞に對する同情心や、愛の恵みの心を養成し、博愛仁義の道にもふとらぬ様、保育の上に注意を望むのが、尤も有効な矯正法であると思ふ。

一 日英同盟と婦人

先に日英新同盟を發表され

ると、間もなく英國東洋艦隊は、先頭第一に我が神戸港を訪問した。其の時水兵は朝から晩まで、何回か上陸して市中を、残す限なく散歩した、其の時尤も多く感じた事は、婦人の服装であつた。なごき袖を指示して、彼の袋は何にするのであるか、又何をいれるのだと、皆問ふたのである。其の説明を聞いても、容易に了解が出来ないで、不思議に思ふて居た、なぜあんなに重もたそ—な邪魔なものをぶる下げて居るのだろ—と、首をかたげて見つめて居たと云ふことである。

一 日英同盟と子供

子供でも英國の富強の有様は知つて居るので、各學校で日英同盟のお話を聞いて、よき親類を持つたといつて悦んだ、其の

影響で第一に英國旗の形から其の作り方まで、幼稚園の様なきと子供までが、すつかりふばへた。又其國旗を皆持參して居て、英國人に出逢ふと、萬歳といつて、渡すのを、非常に喜んで居た、英水兵も萬悦の顔つきで、大きな口と手とを開き、或はわけて禮をして貰つたのである、而して子供は外國人に對する親密の情や、尊敬の心を、知らず、數日間に學び得たのである。斯の如く子供の得た知識は、一二に止まらずして、莫大の者であつたと思ふ。(一一九)

新刊紹介

「明治の婦人」(月一回發行一冊八錢)

實用的才能に尙るに穩健なる美的修養を以つてするもの、これ即ち現代が要求する婦人の資格なり。「明治の婦人」此要求に應じ

て、現代に處さむんとする婦人の好侶伴たらん事を期す」とは、記者の標榜する所にして、文學的材料と、家事的材料とを混合し、率ゆるに倫理的思想を以てしたる精神的ハイカラ雜誌なり女學校を卒業して、理想的家庭を作り、若くば作らんとしつゝある婦人は、座右の伴侶として樂しからん。東京四谷内藤町一番地明治婦人社。

會報

明治三十八年十二月九日午後一時半女子高等師範學校附屬幼稚園に於て本會第三十九常會を開く、出席者七十餘名、野口幹事の開會の辭、女子高等師範學校教授岡田みつ子君の米國ウエレスレーの或三家庭に付ての演説、中村主幹よりは本會より文部省へ幼稚園に關する建議案に付ての協議、研究組合日本橋區及麹町區の報告等あり、茶菓を供して隨意談話に移り午後四時半散會したり、

入會

東京府立女子師範學校附屬幼稚園  
女子高等師範學校附屬幼稚園

右雨森劍兵紹介

女子高等師範學校

鹿兒島縣揖宿郡頰娃村上別府新牧

福島縣耶麻郡關柴村平林

兵庫縣武庫郡魚崎一五八

久保みつ  
大關とよ

高橋はま

山下なせ

宇津木さよ

手塚芳子

山口縣都瀧郡徳山女學校附屬鳳雛幼稚園

麴町區一番町五

女子高等師範學校附屬幼稚園

東京府北豊島郡日暮里村字金杉一六一一

大阪市東區内久寶寺町三ノ二

日本橋區馬喰町四ノ二三

四谷區舟町四〇

東京府荏原郡南品川町知本幼稚園

岡山縣美作國津山町私立幼稚園

香川縣仲多度普通寺町字生野盡誠舎前村松正義方山下ちか

下谷區車坂町七一

本郷區千駄木町五八

京橋區佃島小學松

右事務所申込

右柴岡照氏紹介

右久米たつ氏紹介

會費領收

自治治卅八年十一月廿四日  
至同十二月十六日

金額	年月日	姓名
二〇	三八、九—三八、一〇	下田次郎
六〇	三八、一—三九、四	岩本藤吉
六〇	三八、一—三九、四	福岡吳子
六〇	三八、一—三九、四	乙訓鯛助

六〇	三八、一—三九、四	岩本金太郎
二二〇	三八、五—三九、四	加藤花子
二二〇	三八、五—三九、四	藤田直吉
三〇	三八、一—三九、一	山下なせ
五〇	三八、一—三九、三	大關とよ
一八〇	三七、七—三八、二二	平沼みか
四〇	三八、一—三九、二	宇津木さよ
二〇	三八、九—三八、一〇	中村こう
二〇	三八、九—三八、一〇	林
一五〇	三八、三—三九、五	小原みよの
二七〇	三六、九—三八、一一	川瀬なほ
一〇	三八、一—	槇山榮次
二〇	三八、九—三八、一〇	谷田部じゆん
一七〇	三七、一〇—三九、二	野崎しも
六〇	三八、一—三九、四	高橋いち
二〇	三八、九—三八、一〇	小池みつ
六〇	三八、五—三八、一〇	田村和子
二二〇	三八、一—三九、一〇	井上香憲
二〇	三八、六—四〇、一	今井千代
六〇	三九、一—三九、六	太田とめ
七〇	三八、六—三八、二二	大堀清之助
六〇	三九、一—三九、六	平山ひさ
一〇〇	三八、一—三九、九	手塚芳子
七〇	三八、六—三八、二二	山内定治郎

六〇 三八、一一—三九、四  
 一一〇 三八、一—三八、一二  
 一〇〇 三八、三—三八、一二  
 一二〇 三八、七—三九、六  
 一〇〇 三八、九—三九、六  
 一〇〇 三八、一二—三九、五  
 六〇 三八、一二—三九、五  
 一〇〇 三八、七—三九、四  
 一〇〇 三八、一二  
 一〇〇 三八、一二  
 一〇〇 三八、七—三九、四  
 八〇 三八、七—三九、二  
 五〇 三八、六—三八、一〇  
 五〇 三八、一一—三九、三  
 五〇 三八、五—三八、一二  
 八〇 三八、一一—三九、二  
 五〇 三八、一〇—三九、二  
 二〇 三八、一一—三八、一二  
 三〇 三八、一〇—三九、二  
 三〇 三九、一—三九、三  
 一〇 三九、一  
 六〇 三八、七—三八、一二  
 五〇 三八、一〇—三九、二

山口 山 一〇〇 三八、九—三九、六  
 阿部 芳 八〇 三八、七—三九、二  
 小關 清 五〇 三八、九—三九、一  
 湯淺 君 七〇 三八、七—三九、一  
 小貝 貞 一〇 三八、一二  
 吉田 すえ 二一〇 三七、四—三八、一二  
 松浦 しな 一二〇 三八、一—三八、一二  
 吉田 じゆん 三〇 三八、五—三八、七  
 一色 豊 五〇 三八、一二—三九、四  
 宮崎 そよ 五〇 三八、一二—三九、四  
 神津 ぜん 二〇〇 三七、一〇—三九、五  
 林 ふみ 一二〇 三九、一—三九、一二  
 大竹 みさを 一二〇 三八、一二—三九、一一  
 笹野 豊美 五〇 三八、八—三八、一二  
 千葉 秀 一〇〇 三八、五—三九、二  
 伊藤 良 一〇〇 三八、一二  
 岩崎 こま 一〇〇 三八、一二  
 前野 とき 一〇〇 三八、一二  
 金子 きた 一〇〇 三八、一二  
 鹽見 いく代 一〇〇 三八、一二  
 齋藤 しげ 一〇〇 三八、一二  
 長尾 みれ子 一〇〇 三八、一二  
 吉野 かほる 一〇〇 三八、一二  
 丸山 かく 六〇 三九、一—三九、六

久米 たつ 三八、九—三九、六  
 坂本 なる 三八、七—三九、二  
 武井 綱枝 三八、九—三九、一  
 南彦 朝 三八、七—三九、一  
 上原 留吉 三八、一二  
 佐野 とく 三七、四—三八、一二  
 印東 晋鳴 三八、一—三八、一二  
 北村 いと 三八、五—三八、七  
 青木 まさ 三八、一二—三九、四  
 青木 あい 三八、一二—三九、四  
 小川 小春 三七、一〇—三九、五  
 山根 夏 三九、一—三九、一二  
 堀井 琴 三八、一二—三九、一一  
 宮澤 たまき 三八、八—三八、一二  
 馬場 庸 三八、五—三九、二  
 今立 裕 三八、一二  
 尾田 けい 三八、一二  
 立花 はる 三八、一二  
 新波 やす 三八、一二  
 加藤 せつ 三八、一二  
 堀越 源次郎 三八、一二  
 吉村 千鶴 三八、一二  
 小出 末三 三八、一二  
 萬澤 初子 三九、一—三九、六

# 謹賀新年

東京眼科病院長  
ドクトル井上豊太郎氏著

## 通俗強眼法

氏は眼科に、尤も知られたる人本書の内容に就ては多言を要せず、其名の示すが如く尤も通俗平易に其新療法を説明せり  
米國体育家ベীগマン氏著  
東京朝日新聞記者杉村廣太郎氏譯

●第三版  
●價廿錢  
●郵稅四錢

## 強肺術

肺病を恐るゝ者は讀め、肺病に罹れる者は讀め  
嗽米に於ける最新式體力養成法を讀め此書に四つの特長あり

増補第十三版  
訂寫眞數表  
價三十一錢  
郵稅四錢

第一費用を要せざることを  
第二時間を要せざることを  
第三場所を要せざることを  
第四勞力を要せざることを  
是なり故へに男子は勿論婦人小兒と云へども容易に行ひ得べし  
ドクトル坂田實氏著

## 健腦法

此の健腦法によりて救はれたる人、已に幾千萬讀者諸君がこれに依つて益するところの大なるは素より言を待たず簡明適切なる健腦強腦の新法は即ち本書に詳述せり

○訂正八版  
○價十五錢  
○郵稅四錢

文學士清澤滿之先生著 六版

## 精神講話

精神修養に關する自己の經濟を講じたるものを集めて一冊子としたるを本書とす  
故に本書に向ひて高尚なる議論や、難澁なる理談を望む者は恐らくは、何等の得る處なからしむ

定價三拾錢  
郵稅四錢  
郵券代用二割増

されど眞摯に自己の精神の修養に心かくる者、又は熱心に内心の安住を求むる者、一度本書を讀まば、其所得蓋し尠からざるべし  
ともかくも本書は著者が精神上に實行しつゝ、あつたことを記したるものなるが故に、本書を讀む者亦精神を以て讀むべきなり  
金森通倫氏著

## 貯金のすゝめ

●第十一版  
●價廿八錢  
●郵稅四錢

發行以來十七万部を賣盡せり  
文學博士井上哲次郎氏著

## 釋迦牟尼傳

●第十四版  
●價六十錢  
●郵稅十錢

文學博士高瀬武次郎著

## 王陽明詳傳

●第三版  
●價七十錢  
●郵稅十錢

每月三回發行

## 家庭新聞

一部三錢五厘  
郵稅五厘

家庭及清光を合併改題せり

# 心の花

編輯主幹 佐々木信綱

第十卷第二 (二月一日發行)

- 敵襲
  - 未開人種の歌
  - 万葉集中の花
  - 喜劇新式教授法
  - 嫁入車(小説)
  - 忘れられたる冬の鳥
  - 文話 一枝管見
  - 桂園
  - 貝塚
  - 譯詩(アーノルド)
  - 魷 魷(脚本)
  - 凱旋(脚本)
  - 蝦夷ぶり
  - 狂夫吟
  - かるた會
  - 竹柏園近詠
- △ 每號課題あり投稿を歓迎す  
 △ 定價一冊金拾三錢 半年金七拾五錢

日本橋區本石町一ノ二

竹柏會出版部

森 井理學博士 外  
 坪 井盛博士  
 鴻 巢盛博士  
 藤 澤文盛博士  
 大 塚楠緒士  
 小 柳文學博士  
 井 上通泰  
 小 金井喜美子  
 河 原錦村  
 吉 野歐城  
 新 井雨泉  
 不 破古思郎  
 川 田千  
 石 搏田千  
 佐々木信綱

# ▲新年の最好施本▲

## 戰勝國民の覺悟

定價金二錢五厘  
郵稅 金二錢  
四冊迄

今や平和克復に際し戦後の經營等教育家の最も用意すべきもの多し、戦捷の新年に當り擅信徒へ贈物として好適切の施本なり

## 軍國の民

定價金二錢五厘  
郵稅 金二錢  
四冊迄

日露戦役は空前の大捷にして國民の永く記念とすべきもの戰勝國民の將來を指導せんと欲せば先づ本書の施本に優るものなし

## なぐさめ草

定價金八錢  
郵稅 金二錢

項目○九重雲○若葉○歌○詩○新体詩○赤心微涓○紫電白光○納涼台等にして當代知名の文士の麗筆に成れるもの凱旋の進物として頗る美裝のスケッチなると同時に新年の施本として極めて妙以上三種は新年施本用には五十部以上割の法あり至急申込め

東京小石川區大塚坂下町十七番地

發賣所 加持世界社

# 本社發賣書目

弘法大師	根嶺の曙	釋雲	傳道指針	上宮太子實錄	心的生活英雄史	死生觀	運命觀	女性能觀	禪觀錄	修養と研究
------	------	----	------	--------	---------	-----	-----	------	-----	-------

定價金三錢 郵稅 金二錢 四冊迄	定價金九錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金十錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金七十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄	定價金五十五錢 郵稅 金二錢 二冊迄
------------------------	------------------------	------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------

東京小石川區大塚坂下町十七番地

發賣所 加持世界社



# 本誌 特色

通俗で高尚でそして實用許り  
やさしい文章で面白い書き方  
質問隨意返事は親切で分る迄

# 新年號

紙數多く、記事豊富  
口繪は、優美で奇麗

是非共、一冊讀んで、ごらんなさい

第一第一  
第二第一  
卷號 行發日一月一

# 明治の家庭

定價 一冊六錢  
六冊郵稅共卅三錢  
十二冊一年分六十錢  
郵券代用一割増

- かいしいね…………… 口 繪
- 年始の子供の歌…………… 村上白虹
- 手近かな身の修め方…………… 石見龍二
- 電車の罪か子供の罪か…………… 梓 柳 生
- 幼稚園を嫌ふ兒…………… 老 保 姆
- 須知中佐未亡人の談…………… 守田秋香
- 寝いじりをする子供…………… 小兒科博士 三島通良
- ひゝわかぎれの豫防法…………… ドクトル 青木大勇
- 剛情の子供へのお伽噺懸賞一等文科大學吉川衣水

- 英國人の女中を雇ふわけ…………… ハランド女史
- お嬢様の即席献立…………… 大塚ちか子
- 子供の育て方…………… 人に囁みつく子 ● 物の名を逆云ふ子 ● 齒磨粉につき ● 妊婦と二階 ● しもやけの子 ● 其他 澤山
- 羽子板につき母様に…………… 東洋幼稚園長 岸邊 福雄
- 家事のいろ…………… (質問澤山 ● 返事面白し)
- 春のご馳走…………… 日本割烹學會主 石井泰次郎
- うれしいね花子さん…………… 小寺秋雨
- 第三回懸賞お伽噺募集…………… 優等拾圓
- 雜報

明治の家庭 寶文館

東京市牛込區納戸町六  
東京市日本橋區本町三

發行所 寶文館

電話二二三  
本局三

# 護賀新乘

日一月一年九十三治明

## 目概品賣販

- 一 保險附山葉製風琴、洋琴
- 一 舶來洋琴並に風琴
- 一 鈴木製ヴァイオリン
- 一 舶來ヴァイオリン
- 一 樂隊用吹奏樂器各種
- 一 手風琴、フラジヨール、ト
- 一 戰捷紀念國旗印銀笛
- 一 和洋音樂書各種
- 一 洋琴風琴調律修繕應需
- 一 郵券貳錢御送付目錄進呈

地番三十町川竹區橋京市京東  
 店器樂社商益共社會資合  
 番九十二百五橋新話電

明治三十四年二月廿八日  
 內務省許可  
 第三種郵便物認可